

## 如月悠帆朗読小説集

# 夕暮れ時に燃やす紙片

### § 目次

一月	義眼遊戯
二月	カラス銭
三月	一寸先
四月	不幸になっても
五月	M一家の幸福
六月	輪廻のねじまき
七月	純粹培養
八月	指を売る
九月	ブリキの満月について
十月	書物機関銃説
十一月	海に沈んだ
十二月	月の光に焼かれて死ねば

### ※注意

- ・収録作品の着火点はすべて朗読用に調整されています。
- ・ご自身の朗読で満足できない場合、慣れている人に依頼することを推奨します。
- ・紙片は読了後、速やかに焼却することを推奨します。
- ・火事を起こさないよう身も心も十分にご注意ください。

## 義眼遊戯

「お詫びといっではなんですが、こちらの品を差し上げます。さあ、掌てのひらを広げてください」右の眼窩に指を入れると、男の瞳がコロンと落ちた。義眼だ。あなたの掌には、生暖かい義眼があった。ピンポン球より小さいだろうか。表面のヌメリは汗か、それとも男の涙だろうか。薄気味悪いと感じつつ、どうしても、あなたは掌中の球に気を取られてしまう。「気に入って頂けると有り難いのですが……。中古ではありませんが、なにぶん貴重なものですので。どうか、何卒、ここは一つ、これで手打ちというわけにはいきませんか」

腰をかがめたままの姿勢を保ち、媚びた瞳がひとつだけ、あなたを見上げて震えている。「そんなに貴重な品、受け取るわけにはいきませんよ。他のものではダメなのでしょうか」「お気に召しませんか？　これ以上の品は、生憎のところ持ち合わせておりませんで……」

男は涙目になり、ポケットの中身を広げ始めた。ハンカチ、映画の半券、使用済みの鼻紙、タバコの吸い殻、時間の止まった懐中時計に、古新聞の切り抜き、毛糸など、投げやりな手つきで取り出される。仕舞いには両手を頭上へ持っていき降参のポーズを取る有様だ。

「この通り、他には何にもありません。嘘じゃないでしょう。ほら、もう何もないのです」次第に興奮してきたのか、このまま放っておくと服まで脱ぎかねない様子の男をどうかこうにか宥めすかし、あなた達二人は連れだって、公園のベンチへ腰を落ち着ける。日差しの暖かく感じられる午後だ。木漏れ日が砂場に落ちる。誰も乗っていないブランコは、風に揺られてゆるやかに、前後へ行ったり来たりを繰り返している。ジャングルジムへさしかかる、雲の翳りがうつくしい。あなたと男の他には、影の一つも見当たらなかった。

ようやく気分も落ち着いてきたところで、握りしめたままの右手を開く。手汗にまみれた義眼が、相も変わらずそこにある。受け取ったときには気付かなかったが、見た目はゼリー状の柔らかい材質のようできて、触ってみると意外に堅い。半透明の白濁した球の中心に、長い歳月を経て色褪せてしまったものか、薄茶の瞳が虚ろな調子でぼんやり浮かんで静止している。陽炎のなかで跳ねたボールが、落ちることを忘れたように静止していた。

「サア、陽の光に透かしてご覧なさい。お急ぎなさい。雲でも掛かったら台無しですから」

男に急かされ、言われたとおり、太陽へ向けて瞳をかざす。瞳と太陽の輪郭が重なると、中心部に光の点が生じる。点は徐々に大きくなり、ついには瞳を飲み込んだ。その円の中心に、何か動くものが認められる。ピント外れのぼやけた像は、ほどなく縄跳びをしている女の子の姿に変わった。息も乱さず一定のリズムを刻んで跳んでいる。あなたの視線に気が付かない。一心不乱に跳んでいる。女の子は、単調な縄跳び遊びに夢中の様子。二つに結ったお下げが跳ねる。時の経過も気にせずに、巡り巡って回り続ける縄の輪を、唯々跳んでいるだけだ。それだけなのに、あなたの視線は釘付けだ。男が隣でニタリと笑う。もう、手にした義眼を手放せない。定められた画えを繰り返し繰り返し再生し続けているだけのような、単純な映像であるのに、指先は痺れているのに、目を離すことができない。

「気に入っていただけましたかな？　今日は天気もよいことですし、今よりも、さらにお楽しみ頂ける方法を教えて差し上げましょう。といっても、遅かれ早かれ、自分で気がつくような方法ですが、なに、早すぎるといふことはありません。ちょっと失礼しますよ。いいですか、まず、このスプーンをですね、あ、大丈夫です。そのままの姿勢で結構です。ちよっとの間、瞬きを我慢しているだけですから。動かないくださいね。さあ息を吸って、吐いて、そう、肩の力を抜いて。おっと、彼女から目を離さないよう、注意してください」あなたの右目が静止して、自身の機能を忘れてしまうのに、大した時間は掛からない。

## カラス銭

カラスがカァと一声鳴いて、上がった利率が原因で、首をくくってくたばった、あなたの大切な人の仇である、波止場にとまったアイツが憎い。あのクチバシがもう二度と、溜め息一つ吐けないくらい、痛め付けても気が済まない。羽毛を筆<sup>つえ</sup>って踊らせて、涙を流して許しを請うても、決して許してやるものか。

鍋がいる。大きな鍋だ。ラーメン屋さんの寸胴よりも、もっと大きい鍋がいる。豚よりも、鶏よりも、牛よりも、よくよく煮込んで苦しめて、弱火でしばらく我慢する。焦りは禁物だ。ガス代もタダではない。憎悪も愛も有限だ。あなたの流した涙の数だけ、コンロの炎は揺らめいて、蓋から蒸気が噴き出すだろう。嘆きがスープへ染み渡る。じっくりコトコト煮込んだ悲しみだけが、孤独な時間を慰める。

時々、鍋底に沈んだカラスの様子を見てやろう。あんなに憎くて仕方がなかったカラスのヤツは、骨までとろけてドロドロだ。はじめから、このような有様であったなら、何も起こりはしなかった。コリアンダー、クミン、オールスパイス、カルダモン、大切な人と共に過ごした日々の思い出や、後悔の念、感謝の気持、その他諸々の感情を、可能ならばあなた自身の存在と一緒に、目の前のすり鉢へぶちまけよう。すり潰す。無心でひたすらすり潰す。ハウスバーモントカレーで済ませてやるほど、憎悪はやさしいものではない。

あの鳥は、どれほどの覚悟で鳴いたのだろう。もはや知る術はない。あなたの抱いた感情が、十分にすりつぶせたなら、鍋に入れてしまえばいい。憎悪と悲嘆と思ひ出が、スパイスの香りに包まれて、グツグツグツ煮込まれていく。

クルクルと回るアクの塊、これは憎しみだ。鍋の底から尽きることなく浮いてくる泡、これは悲しみだ。ガスコンロの火を止めて、しばし冷ますと、脂が薄い膜になる。これは、何だ。一体、何が凝固するのだ。借金の清算もまだ終わっていないというのに、傷は塞がってしまふのか。何もかも忘れ、新しい生活を始めろというのか。まだ、外は寒い。指先が凍えてジクジク痛む。手袋もマフラーも質屋に入れてしまった。黒いコートを一つ羽織って、このまま寂しく老いていくのか。蠟燭のようにやせ細り、いつ消えたとも人に知られず、そのまま燃やされ灰になるのか。嫌だ。嫌だ。たった一人の不幸を燃やして何になる。たった一人の灰ごとき、海にまいても飲まれるだけだ。たった一人の灰ごとき、土に埋めても踏まれるだけだ。

点火する。コンロではなく、オーブンに。マッチを擦っても火がつかない。ガス代を最後に払ったのはいつの日だったか。返済の期日は近い。あの人<sup>ひと</sup>が、首をくくった日から、段々段々遠ざかる。どれほど遠くへ逃げようと、日はまた傾き、カラスが鳴いた。一声鳴くたび、利率は上がる。黒い翼が夜空を覆う。まるで、犬か猫かのように、幾つもの路地裏を駆け巡り、あなたは自宅へ逃げ延びる。毎日だ。毎日、毎日、毎日だ。破裂しそうだ。皮膜を破って何が出る。アクか。泡か。とろけてしまったはずの恐怖か。

火が付いた。コンロではなくオーブンに。ここでいうオーブンとは、あなたの部屋だ。掻き集めた髪の毛と、割れた鏡と化粧品。ベッドのシーツに血が染みる。シツカロールの香りが好きだ。いっそ、この場で眠ろうか。しかし、眠くはないのだ、意識は冴えて、両掌<sup>てのひら</sup>を凝視する。皺くちやだ。生まれたときから今日この日まで、何を握ってきたのだろう。こぼれていった悲しみも、愛も、憎悪も有限だった。恐怖ばかりが傍らで、懐中時計を握りしめ、黒いコートを一つ羽織って、律儀に離れずいてくれた。上着をはぎ取り、中身を覗けば、夥しいほど黒い羽。視界を覆い隠して、そのまま。ずっと、そのままだった。

## 一寸先

蠟燭ひとつを灯した部屋で、少年は影絵に夢中だ。クッキーでも食べるように影絵を口へと運ぶ。トカゲの形をしていた影は、胴と頭が千切れている。尻尾はとうに飲み下された。腰を降ろして、もう幾日こうして過ごしてきたのだろう。遮光カーテンを閉め切った部屋で、昼もなく、夜もなく、少年の求めるままに影絵を作り続けた。生まれたばかりの影達を、躊躇なく食べてしまふ彼の食欲は尽きることがない。逃げ惑う指、追いかける指。互いの指は止まらない。意識は朦朧としたまま影を紡ぎ続ける。カマキリは足をもがれた。クモは糸を吐いて巣を張る前に捕まった。トカゲの頭は舌先に転がっている。

少年は笑顔で次の獲物を待っている。次は何を作ろうか。足の速いやつがいい。イモムシは産まれた端から食べられた。イモリは壁にへばりついたが、天井まで辿り着けずに引剥がされた。カエルは鳴いている間に潰された。

どういう道理か、いまのところ、壁に凭れて微笑む少年から逃れ果せた影はない。薄明かりに白い服の端が浮かび上がる。切りそろえられた前髪の隙間から、白磁のような額が覗く。指を舐めつつ、物欲しげにこちらを見ている。血色はよくないように見受けられるが、本当のところは判然としない。何せ蠟燭一つでは、見えるものにも限りがある。

少年の動きは俊敏だ。年若いネコよりも素早い。指先は正確な動きで影を捉える。カニは掌へ吸い込まれて消えてしまった。ヤモリは胸へ飛び込んだ。影は一つ残らず、十分に咀嚼され、飲み込まれた。

影はどこへ消えていくのか。それもまた分からない。飲み込まれているのだから、順当にゆけば、少年の胃袋を経て、消化器官で吸収されていると考えるのが自然だ。食物であれば、排泄されるまでの一連のサイクルがあつて然るべきだが、どうやら影にはそれが当てはまらない。トイレに行く素振りも見られないし、汗をかいている様子もない。

ぼんやり頭を働かせつつ、指の動きは止まらない。気が付けばクロアゲハが視界にチラついていた。右手と左手を交差させ、半ば惰性で作ったクロアゲハ。鱗粉を撒き散らし、蠟燭の火先にとまったかと思えば、気まぐれに右へ左へ漂っている。

少年が目を擦った。微笑も消えた。青白い頬に、幾筋も涙が流れている。端正な形をした顔が歪む。真っ赤に充血した瞳で、飛行するクロアゲハの影を睨み付ける。どこから風が吹き込んだのやら、炎が揺れる。湾曲した翅が、薄まったり、濃くなったりを繰り返す。壁面に淡い斑模様を映し出す。楕円の影が飛び跳ねる。

蠟燭の芯が焦げる音に混じって、少年の爪を噛む音が響く。何故、その指先で、呑気なクロアゲハを握り潰してしまわないのか。本当に噛むべきは、長々と伸びた爪などではなく、伸び縮みする触角や、不規則に瞬く翅だろう。視線は獐猛に空中の軌跡を追っているのに、立ち上がろうとする気配は微塵もない。

指を止めることができない。惰性で生まれる続けるクロアゲハ。二匹、三匹、四匹と蠟燭の火から生まれ続ける。部屋中をチラチラ飛んでやかましい。手を伸ばせば届く距離に影があるのに少年は指先ひとつ、口元から離そうとはしなかった。充血した眼で、恨めしげに影を見上げている様子から判断するに、食欲が満たされたとは思われない。

時が満ちる。空気が淀む。息が詰まる。とめどなく生まれ続ける蝶の群れ。少年の表情も視認できない。深い霧の中にある瓦斯灯の明かりのように、不安な様子で燃え続けている蠟燭を、あなたは一息、吹き消した。少年も影も蠟燭も、何もかもが閉ざされた部屋の中から一瞬で、ほんの一瞬で消えてしまう。



## 不幸になつても

古来、春は裸足でやってくるものと決まっていた。幼女の歩みと同じ速度で、この島国を縦断するというのだから尋常ではない。「四月は残酷な季節です」という書き出しで始まる詩がイギリスにはあるが、あの国は一日のうちに四季があるそうだから、春という季節の悲しみ、残酷さには日々共感せずにはいられないことであろう。「桜の樹の下には屍体<sup>しがい</sup>が埋まっている！」と書いた作家は「これは信じていいことなんだよ。何故<sup>なぜ</sup>って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか」と続けるわけだが、彼は時間の経過について何ら記していない。あれは夥しい生死の氾濫のスケッチだ。近年の例に目を向けると、秒速五センチメートルは確かに速度ではある。しかし、これは桜の花びらが舞い散る速度であって、春の通過とは何ら関係がない。花は散る。人は死ぬ。子どもは大人になる機会を逸して、いつの間にかやら歳を取る。この場所も、やがては見知らぬ人で満ち、ここではない場所に変わってしまう。時計の針は一定の速度で進んでいく。

だから幼女がキスをして、妊娠しても驚かない。ルーマニア生まれの哲学者がいうように「真の悪は、私たちの背後にあり、前にあるのではない」。ヒロポン中毒の作家が、いくらか幻想的な景色を描いて見せても、結末を桜吹雪で覆い隠してしまつては元も子もない。花卉は本来、生殖器である。花びらの舞い散る様は美しいが、盛大であればあるほど「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」という神の言葉から遠ざかる。「生むな、ふやすな、地で果てろ」という方が、まだ相応しい。幼女は生殖から遠く隔てられている。

だから幼女がキスをして、妊娠しても驚かない。背後に迫った葉桜は、過酷な夏を予告する。人生の春を字面の通り、思春期と定めてしまうのは早計だ。これは商品のラベルだ。初鰹や春タマネギと同じ類のブランドだ。単純に、売買可能な身体を識別するための記号で、市場価格の指標に過ぎない。思春期の春は、性愛について意識を向ける季節ではない。故に、我々が現在、目下の議題としてゐる春とは、エクリチュール以上の関係はない。幼女の春は売買できない。固く閉ざされたツボミを、力任せにこじ開けたなら、春などやって来る前に枯れてしまう。それは許されないことだ。あのハンバート・ハンバートですら、ロリータの二人目の男であることを、どうか思い出して欲しい。

だから幼女がキスをして、妊娠しても驚かない。季節の変化は嵐と共にやってくる。卒業、入学、入社など、社会的な発情期と重なることから、生殖行為と彼女の去来を結びつけずにはいられない。人々は彼女を淫乱な女神と誤解する。彼女は一見すると、素っ裸のまま、媚態を振りまいている。しかし、実は裸足で嵐を追いかけているのだ。冬の名残、酷薄な死の累積をたどって、北へ北へと歩いているのだ。花びらは足跡の形だ。排水溝に流され、腐ってしまうことだろう。新しい生活も、やがては日常に成り果てる。倦怠が日々を覆うだろう。停滞は緩慢なる自殺へと移行する。穏やかに時間は流れるだろう。

だから幼女がキスをして、妊娠しても驚かない。時計の針が逆向きに回ることがないように、冬が春を抱擁することはない。この国で、季節が逆の順番に巡ることはない。桜の花が咲いたあと、雪が降ったとするならば、それは冬と春の唇が、軽く触れたということだ。雪はミズレに変わってしまう。足跡も押し流されて、残されるのは泥ばかり。

だからあなたが恋に落ち、不幸になつても驚かない。季節は過ぎて歳を取り、老いても、前へ前へと押しやられるのだ。その道程の始まりで、誰かと触れた唇が、花びら混じりのミズレになつて、溶けてしまつても、何ら驚くに値しないのだ。

## M一家の幸福

ミチコは幸福に暮らしていた。耳がすこし遠いことを除けば、生活に何ら不自由を感じていなかった。都内近郊にある一戸建ての家に住み、息子夫婦と孫に囲まれ、朝は連続テレビ小説をぼんやり眺め、そのまま昼のワイドショー、夕方のニュース、夜のバラエティ番組などを鑑賞して過ごし、布団に入って眠る行為の繰り返し。大病を患うこともなく、毎月振り込まれる年金で孫にオモチャを買い与えることを、ささやかな楽しみとしていた。息子の嫁に呆れ顔で「お母さん、あまりミットオを甘やかさないでください」と注意されたりもするが、「子どもなんて、すぐに大きくなって『現金、現金ちょうだい』」と言いだめるのだから、オモチャで喜ぶうちはカワイイものじゃないの」と返すのが常だった。

ミットオは幸福に暮らしていた。小学二年生のヤンチャ盛りであるにもかかわらず、内向的な性格で、外で駆け回るよりも、室内で行うような遊びを好んだ。近頃、彼が熱中しているのは拷問だ。祖母から買い与えられた首輪や鎖、手枷、足枷で母親を拘束し、好奇心のおもむくままに、蠟を垂らしてみたり、爪をペンチで剥がしたりするのだった。乗馬鞭で打つこともあれば、つい数年前まで、自身の唇が吸いついていた乳首を針で刺し貫いたり、その針に電極をつないで、電流を流したりもした。幸いにも道具は豊富にあったし、足りなくても祖母に頼めば大概のものは手に入った。時折、拷問方法に悩んだとしても、父のミチオの蔵書の中には、参考になりそうな図版を収めた書籍が無数にあったので、問題は容易に解決できた。「僕は恵まれている」とミットオは常々思っていた。犬のように従順な母親の苦悶する表情を眺め、彼は満ち足りた微笑みを浮かべるのであった。

ミチオは幸福に暮らしていた。ミチオは性に奔放だった。不特定多数の異性は言うに及ばず、同性をも性愛の対象としていた。そのうえ、性の分野においては、何でも実践しなければ気が済まない性分で、特に、肛門に対しては並々ならぬ執着を抱いていた。同衾する者の肛門が、無傷なまま朝を迎えることは稀であり、相手が妻であっても、それは例外ではなかった。新婚初夜から連日連夜、ベッドは小さな地獄であった。血と精液とワセリンと、汗と涙と浣腸液と排泄物が垂れ流され、あまりに常軌を逸した行為の結果、妻のミットコは左目を失明してしまった。行き過ぎた放埒の末に起きた事故であったが、これに懲りるミチオではない。ミットコの右目をどのようにめぐり出すか、妄想しながら自慰に浸り、毎夜欠かさず、精魂込めて、妻の身体を責め苛むのであった。

ミットコは幸福に暮らしていた。彼女は妊娠が明らかになった時、自身が処女懐胎したと信じることにした。祖母から妊娠祝いに贈られたピンクの首輪を身につけて、四つん這いになり、夫へ向かって高々と尻を捧げながらも、彼女は自身が思い描いた虚偽の物語に、身も心もドップリ漬かっていた。全身に蜂蜜を塗られ、荒縄で亀甲縛りにされたまま軒下に放置されても「神の子ども」を身ごもった喜びに打ち震え、前後の穴をバイブレーターで犯されている最中であっても、彼女は自分が純潔であると心の中では思い続けていた。右目で見える夫の顔より、摘出された左目を通して見える暗闇を愛した。そうするうちに、心身の苦痛はおろか、感覚そのものが希薄になっていった。出産後もその感覚は続き、夫と息子が母乳を貪っていても、それは、どこか現実味を欠いた光景だった。むしろ、子供は未だに生まれておらず、依然として彼女の子宮で育っていると考える方が、実感に近いように思われた。子供が二本足で歩き始めても、母親になった感慨が沸いてくることはなかった。内面に孕んだ妄想上の胎児を彼女は慈しみ続けた。やがて自分の身体を引き裂いて生まれてくる「神の子ども」へ向かって、彼女は今日も栄養を送り続けている。

## 輪廻のねじまき

気付けば「電車」の中にいる。「汽車」ではなく「電車」と呼ぶのは、蒸気機関の騒音が聞こえないからだ。それ以上に理由はない。大体、何を動力に動いているのか定かではない。得体の知れない乗り物であるから「電車」ですらない。しかし、名前がないのは不便なので、便宜上、「電車」と呼ぶことにする。

コールタールの染みた床、座席はボックスシートであった。乗客は疎らで、席に腰掛けたまま俯うつむいている者もいれば、せわしなく歩き回っている者もいる。

「いつになったら着くのでしょうかね」

話しかけてきたのは少年だった。吊りズボンに蝶ネクタイ、膝にチョコンと山高帽子を乗せ、隣の席で足をブラブラさせている。窓の外に目をやりながら話を続ける。

「もう随分、こうしている気がするのですが、一向に止まる気配がない。一体、これはどうしたことでしょうか。困ったものです。ああ、ノドが乾いたな」

「遠いのですもの。無理ありません。もう少しの辛抱ですから我慢なさい」

少年の発言をたしなめる言葉が、自然と口からこぼれ出る。少年は窓から目を離し、こちらをじっと見つめはじめる。青い右眼と緑の左眼、黒い髪の毛、まるでオモチャのような造作だ。ケタケタと今にも笑い出しそうな様子で口を開く。

「まるで、行き先を知っているような口ぶりですね」

「ええ、知っていますとも」

心の中で、何を知っているかと問うてみる。もちろん、何も分からない。しかし、内心の不安をよそに、口は勝手にしゃべり出す。

「我々は時間へ向かって進んでいます。いえ、正しくは回わ転てんしているのです。この切符をご覧ください。読めますか。左に『懐疑』、右に『時間』と書いてありますね」

「僕だって、これくらいの文字は読めますよ。ただ、じっと座っていても、一向に辿り着かない。それが不満なんです。見て分かりませんか」

「辛抱なさい。今に、あっさり止まるでしょうから」

「地球の自転も、太陽も、月の満ち欠け、星の巡りも？」

「そりゃあ、もう、嘘みたいに止まります」

「飛行機も、渡り鳥も、雨雲も？」

「今にピタリと止まります。空中で静止しますよ」

「まばたきも、心臓も、このお喋りも？」

次の瞬間、全ての動きが静止する。乗客も動作の途中で止まっている。俯うついていた者は、溜め息をはき出そうとしたまま。忙しなく歩き回っていた者は、右足を踏み出そうとした姿勢のまま。行き場のない運動が、ひしめき合って立ち往生していた。言葉は口を飛び出すこともできず、飲み込まれ、消え去ることも出来ず、中途半端に留まっていた。そんな中、少年だけが退屈そうに、足をブラブラさせている。

「もう何周目でしょうかね。あと、何回、僕らは同じ会話を繰り返せばいいのでしょうか。あなたは、もう覚えていないでしょうか。その切符を手にした日のことを。忘れてしまうのでしょうか。僕と交わした言葉を一つ残らず。いいのです。もう諦めていますから。たとえ飲めないと分かっている、僕は飲み物をねだり、あえて知らないフリをして、行き先を尋ねるのです。回転木馬にいつまでも、乗っているのは骨が折れます。けれども、何度でも、あなたの回わ転てんに付き合ってあげますよ。何せ仕事ですから」



## 純粹培養

ショートケーキのようなガラスの箱で育った少女は白熱灯の光しか見たことがない。ショートケーキの味は知っていても、暗闇の中で毛布に包まれ、懇々こんこんと眠る幸福は知らない。つま先から足首まで土に埋まった彼女達は、空調のために通っている管や、食料となる菓子類、ケーキやゼリーを供給するためのパイプに囲まれた薄暗い地下室で、観葉植物のように何不自由なく暮らしていた。空腹や寒さとは無縁だが、退屈や倦怠とは自意識が芽生える前から親しくしている。一日が二十四時間で区切られていることも、一年が三六五日であることも知らない。お菓子以外の食べ物が存在していることすら知らない。ガラスの外から好奇の視線を向ける存在が、自分たちと同じ種族の生物であることにも気がつかない。ガラスの箱の中の他に、何ら世界を知らなかった。

ただ、それも今では過去の話だ。途轍もない音と共に地面が揺れ、様々なものが崩れた。空調は既に止まっていた。ガラスには亀裂が走り、誰かが少し触れただけで、すぐさま崩れ落ちてしまったことだろう。しかし、誰一人として、触れなかった。ガラスの表面に興味を示す者はいなかった。何が起きたのか、理解している者もまた、一人としていなかったのだ。これまでと変わらぬ様子で、彼女らは立っていた。あまりに長く、静止した時間の中で人口の光を浴び続けていたため、変化に対する感覚が鈍感になっていた。眼はものを見ることができないし、耳は聴くことができない。甘味以外の味覚は衰えていたし、ノドの乾きや飢えすら、認識することができずにいた。

明かりは明滅を繰り返していた。幸いにも、まだしばらくは消えそうにない。入り乱れた配管が深い影を落とし、変拍子の奇妙なステップを踏んでいる。背中に人間の耳殻のよりの器官を生やしたラットが、コンクリートの壁を引っ掻いた。カリカリ、カリカリ、音が響いた。その音に比べれば、彼女らの息づかいが密やかだった。小動物が力尽きた静寂よりも静かであった。ホコリの舞う空気に咳き込む者は一人もいない。呼吸を乱す者は一人もいない。酸素が尽きようというのに、肺はそれを知覚できない。苦痛を苦痛として認識することができないし、脳は身体の危機に対して警告を発することができない。

しかし、やはり彼女らも動物である。意識を持っていて、徐々に薄まっていくことは自覚していた。ただ、それが眠りのような、一時的な現象だと誰もが考えていた。意識をまた取り戻すと思ったし、起きたらまた同じ場所に立っている自分がいることを信じて疑わなかった。一人が呼吸を止めた。立ったままだ。息絶えても立っていた。

死ぬ間際の想像力は、白熱灯に照らされた室内を映し出す。彼女はその景色以外に知らないのだ。走馬燈の中にあっても何ら変わりはしなかった。綺麗に磨き上げられたガラスの向こうには、まじまじと見つめる瞳。よく瞬き、よく動く。ショートケーキを頬張り、メロンソーダを管から飲むとき、胸が温かくなるのであったが、彼女は倦怠や退屈と一緒に過ぎすぎたが故に、それが幸福と呼ぶべき感情であることを認識できない。冷たくなっている身体は、温かい夢を放射しているというのに、意識はそれを解釈することができない。こぼれた夢を拾うにしても、残された時間は限られていて、器はあまりに小さく、平べったい形をしていた。光の洪水が意識を荒々しく押し流そうとしているのに、彼女は自分が失われていくことに気がつかない。まだ、失うほどの自分を発見していない。何者にも傷つけられたことのなかった身体は、傷一つ負うことなく、退屈と倦怠、静止した時間を引き連れ、発達することのなかった意識を置き去りにしたまま死んでしまった。死体は生前と変わらない姿勢で、観葉植物のように枯れていく他、何もできそうにない。



## 指を売る

交差点の側にあるタバコ屋の老婆は、傍目には生きているのか分からない。神棚の招き猫と同じように微動だにしない。しかし、客の気配を察知すると顔を見るでもなく、無言で接客を始める。決まった動作をするロボットと思えば――多少の不気味さはあれど――不便はなかった。エラで呼吸する姿をこの目で見るまでは。たしか昨日は、肺で呼吸をしていたはずだ。どういう原理になっているのか、いまいち理解できないが、魚類のエラから酸素を取り込んでいるように見える。会話が難しそうな様子であることに加え、何より漂ってくる空気が生臭い。ひとまず、今日のところは、タバコ屋の前を素通りすることにした。それにしても、困ったことになった。周囲にタバコを扱っている商店は、ここ以外にない。禁煙を検討し始める程度には、悩ましい事態である。

横断歩道を急いで渡る少女の赤いワンピースが目に入る。いや、あれは血だ。横断歩道の向こうにいる、母親と手をつないだ性別不詳の幼子が、ケタケタ笑って指をさす。少女は赤信号を無視して駆ける。後ろ姿が縮んでいく。あの出血では助かるまい。雑な施術だったのだろう。すでに腐りかけているのか、背中に生えた翼から、羽根がホロホロ抜け落ちていた。家までたどり着けるかどうか。高級マンションの建ち並ぶ区画まで、ここから徒歩では随分かかる。アスファルトの上で事切れて、どこかの業者に回収される情景が目につく。死体は捨てる部位がない。ただし、腐った翼は焼かれるだろう。

人間を辞めるのにも金が必要。闇医者に頼めば、安く施術してくれるとも噂で聞くが、Google先生に尋ねてみても、肝心な部分が分からない。大概是、身体の一部を下取りに出し、買い取られた部位を置き換える形で動物の諸器官を移植するのだが、移植のみ行い者もいる。金持ちの大人が、子どもに手術を受けさせるケースが多いらしい。

指の売値は知っている。大概是本物で、案外、手頃な価格である。目玉相場は信用ならない。高価なうえに、偽物や欠陥品が少なくない。心臓はショーケースの中で脈打っているのを眺めるもので、庶民の贖うものではない。人間一人はピンキリだけれど、バラ売りされる臓器の総額と比べれば、随分と安価で買うことができる。生きているほうが安い。

昨今では、人買いよりも屠殺のほうが、しこたま儲かる商売だ。治療より、摘出・解体手術のほうが儲かるし、墮胎するより、出産した赤児を丸ごと売るほうが、何かと得をするらしい。赤児を売って得た金で、高級焼き肉を食べたり、ジャージー牛の乳房を移植する女性が増えている、と昨日読んだ新聞記事には書いてあった。友人知人にジャージー牛の乳房を移植している人間はいないと思うが、確認する術も機会もなかったのも、もしかしたら、みんな毎朝自分の乳房から絞った乳を飲んでいるのか。

信号が変わったので横断歩道を渡り始める。母親と手をつないだ性別不詳の幼子とすれ違う。頭にキツネの耳が生えている。人間としての耳は残っているから、飾り程度の意味しかない、何も聴くことのない耳だ。しかし、この耳を、たとえばナイフで切り取るだけで、子どもはショック死してしまふ。成長するにしたがって、この耳を疎ましいものと感じても、一度、移植してしまった器官を除去する手術は命に関わるものになる。この子は一生、キツネの耳と付き合っていく必要がある。憐憫の視線で見つめたくなるだろう。

明日、指を売りに行く。取り外しできない器官を移植するつもりはない。ただ単に、指を売りに行くのだ。少しずつ、自分の身体を切り売りしよう。臓器になって旅に出よう。売った金で他人の指を買い、腐るまで眺め続けよう。これから進む旅程の終着点を見ておこう。死ぬわけではない。ほんの少しだけバラバラになる。それだけの話である。

## ブリキの満月について

月が綺麗と喜ぶ気持ちは分かるけれども、あれは書き割りの空に吊られたブリキです。だから、あんなに綺麗なのです。大体、本物の月はあるに光ったりしませんよ。本物は光り輝く偽物の裏に隠れて、修繕作業の真っ最中です。

月のアバターは酷いものです。偽物ですらあの有様ですから、本物はもっと傷んでいるのです。磁気嵐や太陽風は、お肌にとっても悪いのです。その上、月はお年寄りです。満ちたり欠けたり、地上の人々を欺き続けてきたものが、ついに限界となり、数年前から代役を立ててやり過ごしているわけです。

修繕作業はウサギが行っています。月ではウサギが奴隷として使役されるものと、大昔から決まっております。可愛いウサギが汗水流し、赤い目をさらに真っ赤に充血させて、昼夜の区別なく、三交代制のシフトを組んで働いているのです。地上から見上げる月は小さいですが、実際の月はとても巨大なものです。千羽のウサギが休みなく働いても、百年程度は掛かる大仕事です。ウサギの寿命は、決して長くはありません。十年生きるものも稀であると聞きますから、月面の過酷な労働環境下にあっては、平均して三年程度、働けばよいほうで、寿命を待たず、ケガや疲労で歩けなくなるウサギの方が多いのです。

働けなくなったウサギはどうなるのでしょうか。簡単です。鍋になるのです。鍋ももちろん、ウサギたちがこしらえます。倒れたウサギを順番に荷車に乗せて運びます。皮を剥ぎ、ぶつ切りにして、鍋の中へと放り込みます。親兄弟に従兄弟、再従兄弟、親類縁者などの係累のみならず、同じ釜のメシを食った同輩達を食べてウサギは働きます。ニンジンや、ダイコン、レンコン、ジャガイモなどと一緒に、ウサギの肉は煮込まれます。ほろほろと、前歯が触れた瞬間にとろけてしまうほど、よく煮込まれていますから、食べるウサギたちには、どのウサギの肉であるか、知りようがありません。ただ、自分たちで仲間を荷車に乗せるわけですから、見当くらはいつているかもしれません。

このような惨い仕打ちを強いている存在は、果たして誰なのでしょう。ウサギたちは知りません。夜空を見上げて考えます。眉間に皺を寄せたまま考え込んで、中にはそのまま飛んでしまうものもあります。そのまま帰ってこないものもありますし、途中で宙返りして引き返してくるものもあります。広大な星空は美しいものですが、また恐ろしいものです。一度、月から離れてしまえば、いくら耳の大きなウサギといえども、自由に飛び回ることはできません。小さな頭蓋の中で、薄れていく意識を抱え、いつ果てるともなく旅を続けることになります。自身の生まれてきた意味や、孤独について、あるいは過去や未来について、様々なことを考えるでしょう。

どこか、地表に降り立つことができたなら、自分の気持ちを伝える相手と巡り会えるかも知れませんが、それはとても難しいことです。ウサギの言葉が通じて、ウサギの伝えたいことが、正しく伝わるとは限りません。一生懸命、丁寧に説明しようとすればするほど誤解されてしまうでしょう。言葉とは、思考とは、理解とは、とても難しいもののなのです。

いずれ会う誰かに対して、片想いし続けることしかできません。手紙を書いて送る手段がありません。瓶に詰めてどこかへ流したとしても、宇宙はとても広いのです。だから、手紙を書きためて、最後に燃やしてしまうのです。そうして星になることで、伝わることもあるでしょう。その塵やホコリを固めて、地表の穴を埋めるのが、ウサギの日々の仕事です。月が再び輝きを取り戻す日まで、あとどれくらい掛かるのか定かではありません。

ああ、今日もブリキの偽物が大層キレイで素敵です。

## 書物機関銃説

書物に見えるあれらは、実は全て機関銃です。段落を埋め尽くす制圧射撃の雨あられ、逃げ惑う意識を追い詰め、周到に用意された言葉がズドンと一発、コメカミを撃ち抜きます。書物は読者の心を血まみれにする機会を狙っているのです。

書架で書物は開かれるのを待ち続けています。時計の針がどこを回っていようと構いなしに、二四時間、三六五日、いつでもあなたを待っています。ホコリをかぶって、日にやけて、たとえ背表紙がかすれて読めなくなっても、開かれる日の訪れることを疑いません。手に取って読まれるものと信じています。

悩めるあなたを楽にしてくれる、いわゆる「銀の弾丸」はなかなか見つかるものではありません。時と場合と気分によって、意識は言葉を読み落とす。弾丸がコメカミを逸れてしまうことも間々あります。銃弾の間を駆け抜けて心が無傷というのは、あまりに悲しい事態です。ページをめくる行為を事件にするため、一冊の書物は編まれているというのに！人間のうつろいやすい意識を相手に、狙いを定めるのは容易なことではありません。記述された言葉は百年経ったら別モノです。字引の中にあつてすら、安穩と過ごしているわけには参りません。言葉の多くは読まれぬ限り、書物に記された記号として、そのまま朽ちて死んでしまいます。これは仕方のないことです。ひとつひとつの文字はインクの染みに過ぎません。書物も読めなければ紙の束です。暖炉にくればよく燃える。井戸につければ水を吸う。時間が経てば、何が記されているのか分からなくなる。機関銃も手入れをしなければ、ただのかさばる鉄クズです。危険は一切ありません。

記述された言葉は死んでいます。閉じられた書物も死んでいます。本棚は死を直立させたまま陳列するための道具です。血に飢えた亡者を収める棺です。インテリアには向きません。湿気とホコリに弱いほか、所有者の知らない間に劣化します。一時、あんなに愛した書物も、時を経て再び顔を合わせてみれば、まるで見知らぬ他人です。一度、血を吸った書物が何度もあなたを撃ち抜いてくれると期待するのは浅はかです。一言一句変わっていく言葉は静止しているのにあなたは生きています。生きているということは、変わり続けることです。壊れ続けることですし、失い続けることです。かつて大切だった書物が色褪せて本棚の片隅で忘れ去られてしまっても、それは仕方のないことです。

弾薬も元を正せば血液です。呼吸を止める一撃を用意するにも血が要ります。傷から流れる鮮血にペン先をひたして言葉は紡がれます。記されて間もない言葉は読むにたえないものばかり。涙に濡れればにじみます。絶叫はかすれてしまつて何と書かれているのやら。不要な部分を取り除き、鋭利な形に削ります。時間を掛けて丹念に仕込みます。あなたの心に突き刺さる、その日を夢見て一行を凶器に仕上げているのです。

書物は読者を救いません。言葉は幸福を与えてくれはしないのです。銃火の中で授かった銃創だけが標です。そこから先へ至るには、歩き続けるしかないのです。撃たれつつ、意識の荒野を進むほか術がありません。できるだけ多くの弾を浴びましょう。機関銃の有効射程へ飛び込んで、粉々に打ち砕かれてしまえばよいのです。鼓膜を引き裂く銃声に、細切れになる意識、飛散する骨、肉、ホラ、すっかりバラバラ。でもまだ歩けるでしょう？毎晩、ロシアンルーレットに興じます。書物を開き、コメカミに銃口をあてていると、背筋が震えてしまいます。もし、夜が明けてしまつても、この書物が機関銃であるか、不安で仕方がありません。銃口よりも、血まみれの掌よりも、何よりも、この傷が癒えてしまふのが恐ろしいのです。祈りを込めて引き金に触れる、「どうか消えない傷をください」。



## 海に沈んだ

たった数行の手紙すら書き終えることができません。率直な気持ちを書き連ねても二言三言で止まってしまふ。不特定多数に読まれるのであれば、このような気苦労もなく、気のきいた冗談でも思い浮かぶのでしようが、素直な言葉をまとめた形にするのは気恥ずかしくもあり、なかなか上手くないものです。

あの日は雪が降っていましたね。プラットホームに人影もなく、並んでベンチに座っていました。覚えていますか。とっぷり日も暮れた午後七時、上弦の月が出ていたはずです。卒業を間近に控えた時期でした。いつもなら、赤ちょうちんの暖簾をくぐって一杯引っかけている時間です。それなのに、あなたは家路を急ぐ始末です。雪でダイヤは乱れに乱れ、次の電車はいつ来るのやら、てんで分からぬ有様だというのに。

あなたは何か焦っていましたね。卒業制作がまったく手つかずだったから？ お腹が減っていたから？ 寒かったから？ それとも月があまりに青白かったから？ 降り積もっていく雪にはしゃぐでもなく、交通機関の混乱に苛立いらだつでもなく、あなたは線路の向こうを見ていました。あの時、あなたは何を見ていたのでしょうか。同じ景色を見ていたはずなのに、それが今でも私にはわかりません。

線路を挟む街路樹のように建ち並んだビル群は、街灯と月明かりに照らされています。建物の中に引きこもっているのか、行き交う人も絶えて久しく、雪がちらつくばかりの静けさ。聞こえる音といえば二人の真白い呼吸のみ。コートにマフラー、片方だけの手袋も、あなたに借りたものでした。温もりだけが一方的に差し出せる、たった一つのものであるというのに、それすらも徐々に失われていきました。

暖かい場所で育ったものですから、なにぶん、寒さに弱かったのです。どうか責めないで下さい。私も知らなかったのです。体の自由がきかなくなってから、取り返しのつかない事態に陥っていることに気が付きました。手足は端から痺れて動くこともできません。あなたに助けを求めようにも、舌がもつれて上手く喋れませんし、体の力は抜けていきます。最後の言葉は動く触手で、降り積もっていく雪の上に記すのが精一杯でした。冷たい雪に文字を書くのは骨の折れる作業で、触手は思うように動いてくれませんでした。あまりの苦痛に私は――作業半ばでありながら――思わず目をつぶってしまいました。

目をつぶると南国の砂浜が見えました。砂浜の上に指先で文字を書いては消してを繰り返す水着の女がみえました。ああ、まったく微笑ましい光景です。体は寒さに震えることもできない有様だというのに、目蓋の裏には真夏の陽差しが降り注いでいるのです。安らかな気持ちになっている自分に内心で腹を立ててはみたものの、自意識の境界も段々とおぼろげに、まるで眼裏まなうらの太陽に溶けるように薄くなり、私は冷たくなってしまいました。

最後に私は書こうとしました。「どうか海に沈めてください」と。ちゃんと書けていましたか？ 努力はしたつもりですが、判読できるように書けたか、いささか自信がありません。しかし、ここは信じることにして、私は海に沈んだものとしましょう。海の底で温もりを取り戻した私が、この手紙を書いているものとしましょう。つまり、私はここがどこなのか、未だによく分かっていません。記憶を頼りに、こうして文字を書いています。人間がどれくらい生きるものなのか、詳しく覚えていませんが、大丈夫でしょう。この程度の記憶の欠落で済んでいるということは、百年程度のものでしょうから、あなたも元気に暮らしていることと思います。そこは暖かいですか。卒業はできましたか。ビールが恋しいです。再会したら、赤ちょうちんで乾杯しましょうね。では、また。

## 月の光に焼かれて死ねば

月の光に照らされてピアノが燃える。弦の断たれたピアノばかりが、幾つも砂浜に足を埋めたまま佇んで燃やされる順番を待っている。グランドピアノからトイピアノまで、種類は様々だった。すべてのピアノが役割を終えていた。ここは音楽の火葬場だった。

ピアノは満月の夜になると、どこからともなくやってきたトラックの荷台から降ろされる。百年近く大切に使われたものもあれば、一年も経たないうちに壊れてしまったものもある。カビやホコリに覆われたものもあれば、本当に壊れてしまったのか傍目には分からないピカピカの新品同様のものもある。見目麗しい豪華な細工が施されたものもあれば、見るからに粗末な仕上げのものもある。ただし、まともな音の鳴る代物は一つもなかった。ひとつひとつに物語があった。鳴らした音があり、奏でてきた曲があった。その鍵盤に触れた人がいた。耳を傾ける人がいた。拍手し賞賛する人々がいた。難曲に挑む小さな掌があった。思うように弾けず、十指を叩き付けた人もいた。恐る恐る鍵盤を撫でる幼い指があった。老いても自分の身体の一部のようにピアノを操る人もいた。流れた汗や涙があった。血も流れた。歓声に悲鳴、怒声すらあった。しかし、すべての時間は過ぎ去り、いまは空へと昇る煙に変わるのを刻一刻待つばかり。

孤独に過ごしたのもあれば、数多の楽器に囲まれて活躍したピアノも少なくない。しかしながら、いくら酷使されたピアノであったとしても、もともと親しい楽器は静寂だった。人の手の触れない時間がピアノの生涯の大半を占める。定められた音を鳴らすため調律された弦は、待機状態のまま静かに調子を狂わせていく。音を立てずに自らも気付かなくなまま少しづつ壊れていく。不調に気付いた持ち主が修理に出しても同じである。元通りになったように見えても、内側では相も変わらず壊れ続ける。壊れ続ける途中ですこし、ピアノは音を鳴らすに過ぎない。輝かしい仕事の時間は一瞬だ。残りは膨大な沈黙で埋め尽くされる。ただ、いまは砂に埋まって燃やされるのを待っている。

炎はなかなかピアノを灰にしない。舐めるように這い回り丁寧に弄ぶ。パチパチパチ、と拍手にも似た音を立て、白鍵も黒鍵も選り好みせず、ゆっくりと飲み込んでいく。どのようなピアノも例外ではなかった。大ホールで観衆の涙を搾り取ったピアノも、死んでしまった幼子の誕生日にプレゼントされたオモチャのピアノも、監獄の中で囚人の心に一時の癒やしを与えたピアノも、等しく灰になった。無名の作曲家が愛する人に贈る歌を作ったピアノも、神の営為を賞賛する曲を奏でたピアノも、跡形もなく灰になった。炎は容赦をしなかった。幾ら時間が掛かっても、獲物を捕らえて逃さない。一度でも抱きしめた恋人は決して離さない執念深い女であった。

月は冷たく見下ろしていた。いつだって、何に対しても冷淡だった。あまりに酷薄だから、どんなにピアノが燃やされていても気にしなかった。すべてのピアノが燃えるまで、彼女は退屈そうに眺めている。夜が明ければそっぽを向いて、再び気ままに欠けていく。彼女に縁のある曲を奏でたものも少なくない。彼女の光を浴びて長い夜を過ごし、機会があれば、デュエットを演奏したものだと願ってすらいた。しかし、彼女は歌わない。月の光は静寂に似ていた。徐々にピアノを狂わせる静寂は月の光と区別がつかない。彼らはいま懐かしい月の光に包まれている。かつて鳴らした音のかげらと、断片化した思い出を蓋の裏側に詰め込んで、燃え上がる炎の長い長い抱擁を受け入れていく。

役目を終えて灰になったピアノは風に吹かれて飛んで、海が歌う潮騒の一部となって、世界中のあらゆる場所で踊り続けた。この星が減びてしまうその日まで踊り続けた。